

後藤新平と芸術・文化～劇曲『平和』～

新平の祖父実仁は、緻密な頭脳の所有者で、塾を開いて、数学を教授しました。父實崇は、小姓として若殿の和歌稽古や詩会・槍術稽古、講経及び馬術稽古のお相手を務めました。漢学・国学を修めたほか、茶道・小鼓・遠州流の生花・喜多流の謡曲・小笠原礼法に通じていました。祖父・父の血を受け継いだ新平のマルチの一端を紹介します。

【劇曲『平和』】後藤新平構案／大道良太・平木照雄（白星）合作

この劇曲『平和』は、後藤新平が構想した演劇の原作です。

ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の黄禍論に反対して、日本と英国とが相提携して戦禍を克服する



※右手炎の中に仏陀、左手に十字架が頭上に輝く。ヨーロッパ諸国を擬人化した女神たちの前でキリスト教の大天使ミカエルが戦いを呼びかけている。

話で、本の扉には、「この劇曲を欧羅巴なる某主権者に奉獻す」とあり、また、口絵にはヴィルヘルム二世が構図して画家であるヘルマン・クナックフースに描かせた「黄禍論」の絵を入れています。

【戦魔】『顔の黄い垂細垂人が欧羅巴に災するのじゃ、あの光りものがその禍災の起る兆候、黄色人種が白色人種を侵す合図の火とは知るまい。』（※欧羅巴：ヨーロッパ）

【一の女】『何という？あの黄色人種が・・・』



【大国民唱歌】後藤新平作詞・田村虎蔵作曲／明治39（1906）年5月18日



新平が台湾民政長官時代に作詞したもので、「第一種」と「第二種」があり、なおかつ「漢詩」バージョンも作りました。作曲をした田村虎蔵は鳥取出身の作曲家で、東京音楽学校を卒業後、東京高等師範学校兼東京音楽学校助教諭を務め、「言文一致唱歌」（話し言葉と親しみのある曲）を提唱しました。作曲したものに「金太郎」（石原和三郎作詞）や「一寸法師」（大和田建樹作詞）、宮城県立古川高等学校校歌（星合愛人作詞）などがあります。

【第一種】
一、世界の友よ我友よ
いかなる民か大國民
大國民は土地廣く
民衆きをばいふべしや
二、世界に無比なる我國體
建國以來日の御子の
輝く光仰ぎつつ
さかえさかゆる君子國
三、三月の春の朝日影
のどかに匂ふ山櫻
うつつうえつる花うばら
み國の花と咲きそひつ

【書・詩】「終始一誠意」
しゅうしいついにいをまことにす
最初から最後まで誠意を尽くさなければ、何事も成就しない。
（中国・宋の時代 朱長文の詩）



祖父實仁は、6歳の新平を藩中の漢学者武下節山に託しました。新平は才気煥発で、会読や詩会でも年上の者と同等に渡り合いました。書は、祖父が少年新平の頭を撫でて、「学者になるな。書家になれ。書家になれ。」と言ったほどでした。大正7年、戯れに話したこんな言葉が、雑誌に掲載されています。「地方などに行くと、否や応なしに書かされるので、姓名を記するに足る許りじゃ行かんことになった、これが六十の手習をしようと云ふ動機になった、それも然しやってみれば、却々趣味のあるもので、遂には今までは、あまり気づかなかった古人今人の書のよし悪しまでも、わかる様になった……………我輩の書か、近頃何でも二三十円に売れると云ふことじゃ、…」



【馬】
礼法や弓術・馬術を含む「小笠原礼法」に通じていた父實崇の影響を受けたであろう後藤新平。鉄道院総裁時代の秘書増田次郎が次のような話を残しています。「逡相時代の初め頃は、伯は二頭立ての馬車を使用された。伯は馬が大好きで、わざわざロシアへ行った際、ユハレニコフ牧場で馬を選んで日本へ送らせたほどで、伯の乗用馬車は堂々たる車であり、総理大臣の馬車よりも立派であった。」

